◎最近欧州事情——ポーランド

厳冬のポーランド

去る二月ポーランドを訪れる機会があった。以下は、一旅行者の垣間見たポーランドの表情である。

ダンチヒ

雪のワルシャワを午後四時に飛び立ったソ連製イリューシン双発機がダンチヒ（グダンスク）に近づく。機内は、ポーランド人の普通の市民で満員である。通路の前後に二人の兵士が突っ立って監視しているのが西側とちょっと違う点だ。亡命を目的とするハイジャックを恐れているのだそうである。午後五時、既にとっぷりと日の暮れたダンチヒ空港に着く。気温零下一七度。寒い。明朝は、零下三〇度近くまで下がるだろうとのことである。白一色の滑走路にさらに降りしきる雪を見て、明日ワルシャワに戻れるだろうかと心配になる。

タクシーの運転手が英語とドイツ語で話しかけてくる。ドイツ語の方がうまい（東欧圏では、英語よりもドイツ語の方がよく通ずる。歴史的な理由に加えて、今日においても経済面をはじめドイツとの関係が深いからであろう）。といっても、単語数にしておそらく五〇〇語前後、片言である。それでも話が通ずるだけ大いに助かる。帰るまで雇い上げることにした。名前を尋ねる。「X氏だ」と言う。今日は、空港で六時間も客を待っていたんだそうである。市内まで、森の道を二〇kmほど走る。日本人は皆、学校でポーランド民謡「森へ行きましょう、娘さん」を習うんだと言って、日本語で歌ってやると嬉しそうな顔をした。

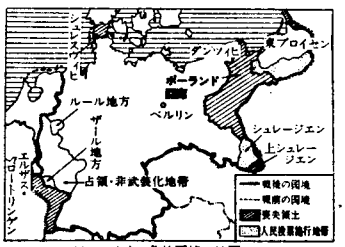
哲学者ショーペンハウエルの生まれたダンチヒの湾を隔てた北の対岸にこれまた、哲学者カントが生まれ、活躍したケーニヒスベルクという都市がある。今日では、ソ連領になってしまっており、名前も、カリーニングラードというが、かつて同市は、ドイツ騎士団の後のプロイセン公国の首都であった。その後、ベルリンを首都としていたブランデンブルクと一緒になってプロイセン王国となり、膨張につぐ膨張を続け、遂には、ドイツを統一に至らしめたことは、周知のとおりである。したがって、ある意味で、ここらあたりは、ドイツの本拠地ともいえるわけである。

ところが、第一次大戦後のヴェルサイユ条約でポーランドが独立することとなり、ドイツは、旧プロイセン王国が三次にわたるポーランド分割で得た領土を返還させられることとなる。この際、ポーランドは念願であったバルト海に抜ける地域を獲得、これによって、ドイツは、本国と東プロイセン地域を分断されることとなるのである。これが世に有名な「ポーランド回廊」である。この時、ダンチヒは、「自由都市」として国際連盟の管理下におかれている。

第二次世界大戦は、このダンチヒを奪取せんとするヒットラーの一九三九年九月一日のポーランド侵攻電撃作戦で始まった。ポーランド全土は、またたく間にドイツ軍の蹂躙するところとなり、ダンチヒは、その九五%が破壊し尽されたといわれている。

戦後、ポツダム協定に従ってオーデル・ナイセ以東のドイツ人数百万人は本国に追い立てられ、その後に、ソ連領となった東部方面からポーランド人が流入した。今日、この地域には、ドイツ人は、もはや居住していない。

ダンチヒは、戦後、ハンザ同盟都市の往時をしのばせる昔の美しい姿そのままに復元された。特に、中世ゴシック時代の建物が立ち並ぶスタレ・ミャスタ（旧



ヴェルサイユ条約国境の地図
（世界各国史3「ドイツ史」による）

ハンザ都市ダンチヒ——ドゥガ通り——

市街）は、「バルト海随一の美しい港町」といわれている。

タクシー（フィアット）は、レーニン造船所の前でパンクした。タイヤを交換するから、その間に散歩して、「ワレサ記念塔」でも見てこいと言う。なるほど、造船所の前の暗闇になにやら高い塔のようなものが三本立っていた。ちょっと最近建ったもののようにも見えなかったので変に思ったが、後で聞いたところでは、ゴムルカ政権を退陣へと追い込んだ一九七〇年の民衆の蜂起を記念したものだそうである。ダンチヒでは、何でも「ワレサ」になってしまう。寒くて寒くてじっとしていられない。急いでタクシーの所に戻ると、幸いタイヤの交換は終了していた。車を走らせながら、「あのアパートがワレサの家。ワレサ良い、ヤルゼルスキー悪い。」と言う。政府に対する不信の念が非常に強い。

オルガン演奏を聞きに集まったポーランドの子供たち
——パイプオルガンで世界的に有名な
ダンチヒ近郊オリーバの教会で——

二　民、信なくんば立たず

夜は、これまたX氏の案内でダンチヒ郊外の私企業レストランで食事をとることとする。おカミは、一〇年米国にいて五年前に帰ってきてこのレストランを経営しているのだそうである。シカゴ付近には、三百万人のポーランド人がいると聞いた。流暢な英語で「何にいたしますか。」ときた。オランダのビールとポーランド名物だという鴨の腹にリンゴを詰めて焼いたものを注文する。大体、ポーランド人は、口が贅沢である。連帯運動前一九七八年のポーランド国民一人当たりの食肉類消費量は、七一キログラムでイギリス人と同水準にあったぐらいである。ワルシャワ在住の日本のある商社の人の表現を借りれば、「ポーランド人は、外国から多額の借金をして、これを全部胃袋に入れてしまった」んだそうである。

「勘定は、西ドイツマルクでしたい。」と言うと、「ダメだ。」と言う。外貨の受取りは、固く禁じられているらしい。「ノープロブレム、ノープロブレム！」とX氏。どこかで替えてくるらしい。周囲をキョロキョロと警戒しながら「交換レートはこれでどうだ。」と紙に書いて示してきた。「一DM＝一五〇ズロチ」とある。持参の旅行案内書には、「一DM＝三〇ズロチ」と書いてある。五倍だ（後でわかった所では、公式レートは、現在一DM＝約七〇ズロチ。闇はその四―五倍だと言われている。その運転手は随分結構な商売をしようとしたことになる）。小生のように善良なる日本国民がこのような闇レートに手を出すはずもないが、それにしても、大変な安さである。外貨があればあこがれの外国製品（勿論西側の）が手に入るということと、ポーランド経済の現状自体に対する評価が極端に下がっていることとに起因するものであろうと思われる。しかし、一般国民は、これを恥じることも忘れ、それどころかその裏をかいて一商売しようとする、あるいは、せざるを得ない現状にあるように小生には思われた。

X氏は言う。「ろくに寝ないで一月一〇、〇〇〇ズロチの稼ぎだ。その中から住宅費に五、〇〇〇、光熱水費に二、〇〇〇消えていく。おまけに、ガソリンはタクシーに対しても一日一〇リットル（一般人は月三〇リットル）の割当てだ。一〇リットルじゃあ九〇㎞ぐらいしか走れない。どうやって親子四人食っていくんだ。」（ポーランドではたいていの夫婦は、共稼ぎであること。平均賃金も、三五歳の夫婦子供一人の家族で平均三〇、〇〇〇ズロチという数字もあることから考えると、彼の話が誇張でなければ、彼の場合はたまたま相当低い所得階層に属しているということであろう）。

「あんたら日本人は、月にどのくらい稼ぐんだ。」と言われて「月二〇万円かな。」と言うと、紙の上で換算してみせ、「ポーランドじゃ、日本人は皆ミリオネアだ。」と言う。よく見ると計算間違いで零が一つ少なかったが、気の毒でそれを訂正する気にもなれぬ。「まあ、日本も物価は高いし、お宅の国ほど医療、住宅、交通費も低廉ではない。」と慰めておいた（但し、住宅難は、ポーランドの一つの大きな社会問題になっているのだそうである）。

一九八〇年夏の食肉価格の四〇％―六〇％の値上げに端を発したポーランドの連帯運動は、ソ連の軍事介入を恐れたヤルゼルスキー軍政による戒厳令の施行により、非合法化され、地下にもぐることとなった。今日、「連帯」は、かつてほどの力を持っていないと言われている。しかし、これは、「連帯」の動きが失敗に終ったことを意味していない。「連帯」を支えた国民の要求は、一方においてヤルゼルスキー政権をして、一九八一年以来の経済改革に踏み切らせているとも言えるからである。一連の改革は、中

央集権的システムから企業の自主経営を尊重する方向へ向って、経済の民主化、分権化を進めようとするものであり、ハンガリー型の誘導市場モデルをめざそうとするものだそうである。

この結果、一連の経済混乱で一時一〇年前の水準にまで落ち込んだ国民経済は、八三―八四年には幾分好転を見ている。しかし、これもつかの間、八五年には再び鈍化、依然としてポーランド経済は、予断を許さない状況にある。

特に、八五年五月現在二七五億ドルに達したと言われている対西側債務については、その償還は理論的に不可能だと言われるほどであり、ポーランド政府の最も頭の痛い所となっている。

ワルシャワ市内の市場を訪れてみたが、意外に品数も多く、ある市場では、東ドイツでは見られないと言われているバナナ、オレンジ、レモン等が色も鮮やかに積まれていたのには驚いた。但し、値段がものすごく高くて普通の市民は、買いに来ない、来れないのだそうである。あるポーランド人によれば、戒厳令施行後、法の裏をかいて儲ける者も出て、貧富の差は拡大しているとのことである。また、法の裏をかいている者ではないが、今一番羽振りのよいのは、都市近郊の自営園芸農家だそうである。ワルシャワ郊外にも、これらの農民の花卉を栽培するビニールハウスが目についた。このようにして高所得を有するようになった者だけが比較的高いレベルの生活を享受しているとのことであった。

ワルシャワ市内の市場
――バナナ、レモン、オレンジが目にも鮮やか――

ともかく、ポーランドでは、特に国民の政府に対する不信が強いのには驚かされる。百年以上にわたる祖国喪失の歴史のしからしめる所であろうか。カソリック教会の強さにもよるものであろうか。はたまた、米国等の海外のポーランド人との仕送りその他の交流も影響しているのであろうか。孔子「論語」の「自古皆有死。民無信不立」の一節がしきりに思い出されるのである。

三　ソ連とポーランド

ポーランド人は、チェック人、スロヴァキア人とともに西スラブ族に属する。スラブ人の一派だからロシア人とも親戚みたいなものである。例えば、言葉も近い。ロシア語で「さようなら」は「ダスヴィダーニヤ」であるが、ポーランド語で「ドヴィゼーニア」と言う。「今日は」「今晩は」は、ロシア語で「ドーブルイ　ディエニ」「ドーブルイヴェーチェル」であるが、ポーランド語では「ディエン　ドーブリ」「ドーブリ　ヴェーチェル」だそうである。キリル文字とラテン文字の違いで、書いたものは全く異なるように見えるが、発音される言葉は、非常に近いような印象を受けた（モスクワ大学留学経験のあるワルシャワ大使館の某氏も、「非常に似た言葉だ。」とおっしゃっていた）。

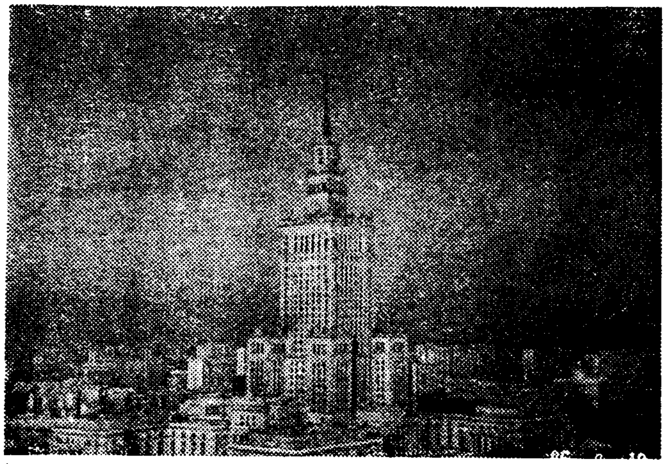
また、食べ物も驚くほど似ている。ボルシチもあれば、ウォッカもある。ポーランド人は、ウォッカはポーランドが本場だと思っている。実際実にうまい。四〇度前後のものを冷やしてそのまま一気にクイーとやる。余談であるが、ワルシャワ在住のある日本人が「土地の物を食いたい」との我々の希望を聞いて、「それでは是非スープはボルシチを。」と勧めた。「こんなマズイものはない。」のだそうである。ポーランドに来た客には、どんな顔をするかが楽しみでいつも勧めるらしい。出て来たものは真赤な色のすまし汁である。たまたま同席していた他の日本人たちも、我々の口元に注目する。ところが、小生にとっては（味は少し甘すぎるようには思われたが）、ポーランドの人たちはおそらく手の込んだやり方でこの汁を煮出し、一つの料理文化として珍重しているんだろうと考えると、嬉しくて最後まですっかり飲み干してしまった。皆があまりに感心するので、「ドイツ料理に比べれば味が上品でうまいですよ。郷土料理と郷土民謡をマスターしないことには我々地方行政マンは勤まりませんのでね。」と答えておいた。

雪のショパンの生家の庭で
――案内のポーランド美人ハンナさんと筆者――

このように、ポーランド人とロシア人は、民族的には極めて近い。にもかかわらず、ポーランド人のソ連人を嫌うこと

には甚しいものがあるようである。

その第一の理由は、宗教、文化の違いにある。ポーランドは、東はロシア（キエフ侯国）に、西はドイツ（神聖ローマ帝国）に対抗する必要上から一〇世紀にカトリック教を導入した。その後、祖国を失ったこともある長い歴史を通じて、ポーランドは、そのアイデンティティをカトリック教に求めてきたと言っても、過言ではないわけである。だから、宗教は阿片であるとも言われる社会主義国の中で、ポーランドほど宗教勢力の強い国もない。現ローマ法王は、ポーランド出身である。「連帯」を支持したポピエウシコ神父は、その影響力故に内務省職員によって殺害された。



ソ連から贈られた文化科学宮殿（ワルシャワ市内）

また、これと関連して、ポーランドと西ヨーロッパとの結びつきも、歴史的に深い。文化は、いつも西側から入って来たのである。ワルシャワ郊外にショパンの生家がある。ショパンの父は、当時のポーランド貴族にフランス語を教えるためにワルシャワに来ていたフランス人であった。今でも、五年に一度ワルシャワでショパン・コンクールが開かれ、世界中から音楽家が集まる。また、例えば、堂々としてしかも美しいワルシャワの街を見ると、ポーランドの文化水準は、相当の高さにあるなという印象も受ける。

このように、あれやこれやで、ポーランド人は、ロシア人を低く見る傾向にあるのである。自分たちは自由の民であるが、向こうはまだ隷従の民だというわけである、ソ連からポーランド国民への贈り物として建設された文化科学宮殿は、ワルシャワ市民にはあまり評判が良くないと聞いた。そして、そのロシア人に抑えつけられているのが遺憾ながら東西対立下のポーランドの現状なのである。益々ロシア人が嫌いになるのも道理である。

第二の原因は、ロシアとの関係の歴史にある。ワルシャワの旧市街市場広場の一角に市の歴史博物館があるが、戦時中のドイツの犯罪的行為を展示する部屋と並んで、一八三〇、四六、六三年の民衆の蜂起をそれぞれ展示した部屋が三室ある。いずれの蜂起も、ポーランドの多くの人々の流血の犠牲にもかかわらず失敗に終ってしまうのであるが、これを当時弾圧したのは、いずれもロシアだったのである。

また、第二次大戦中ソ連が四、五〇〇〇人のポーランド士官を集団殺害したといわれるカチンの森事件、自らの軍隊によってワルシャワを解放し戦後のポーランドを支配下に置くことを願ったものといわれている一九四四年のワルシャワ蜂起の際のソ連軍の非協力、これらの事件も、ポーランド人が忘れようとしても忘れることのできないものである。

* *

しかし、いかにポーランド人がロシア人が嫌いであれ、また、いかにポーランドの経済が社会主義的計画経済システムの下で破綻に瀕しようと、今日の東西関係の下において、全地球的規模の核戦争の脅威なしにポーランドが自由主義陣営側にすんなり戻るということは、おそらく考えられないものと思われる。その状況如何によっては、世界の運命につながりかねないという意味において、日本国への輸出の第一位がフォークランド沖のイカ（同国漁船による）だという遠い国ポーランドの状況も、また我が国に無縁ではないのである。

* *

デュッセルドルフに戻ると、今はポーランド領となったポンメルンから逃げて来たという事務所の家政婦のチュペルスキーおばさんが、ダンチヒ出身だったという亡夫を思い出したのか目をうるませながら「ロシア人よりポーランド人の方がもっとひどい仕打ちを我々にした。」と訴えた。オーデル・ナイセの東には、今も怨念が渦巻いている。

（片木　淳　大阪市経済局参事 西ドイツ在勤）

ベルヌ 著作権条約 100年 1886-1986